

GF

ジェンダーフォーラム
通信
GENDER FORUM PRESS
女とは？男とは？考えるマガジン

和光大学

ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

EXHIBITION

企画展示

和光・スポーツ・ジェンダー

2009年6月20日(土)から6月27日(土)にかけて、梅根記念室において、企画展示「和光・スポーツ・ジェンダー」を開催しました。在学生をはじめ、教職員や外部の方、また最終日にはミニ・オープンキャンパス開催日と重なったため高校生や父母の方など、大勢の来場がありました。

今回の展示は「ものに見るジェンダー」というテーマで企画し、学生や教員、スタッフにもさまざまなスポーツウェアの提供を呼びかけました。一番多く集まったのは水着で、展示では、古い年代のものはパネルや映像での紹介になりましたが、80年代、90年代、そして近年のモデルは実物を紹介することができました。ミズノからは、競泳用水着3点の提供があり、なかでも最新モデルの〈ミズノ SST〉は大きな注目を集めました。他にも、空手着やテニスウェア、和光大学のさまざまなクラブ活動のユニフォームを展示することができました。

パネルでは、一般の人々がスポーツやレジャーを楽しむきっかけとなったのは「余暇」の誕生であったことや、スポーツウェアが衣服の構造に革新をもたらし、つい新しい合成繊維の開発にも貢献したこと、デザイナーも機能的

で実用的なファッションを発信するようになり、女性の美の基準、そして人々の意識にも変革をもたらしていったことなどを紹介しました。また、女性が競技へ参加できるようになった過程についても、オリンピックの歴史を写真や年表で振り返りながら展示しました。

多くの人にとって身近なものであるスポーツ、そしてスポーツウェア。改めてその歴史を振り返り、社会の変化をたどってみると、さまざまな発見や気づきがあったのではないのでしょうか。今回の展示が、「ジェンダー」という社会・文化的な性について考えるきっかけとなったことを、企画者として願っています。 (中力えり・現代社会学科)



▲ミズノの水着は展示の目玉に！ 右端が最新モデルのミズノ SST



▲パネル説明を読み展示物を見てまわる人たちにぎわう梅根記念室。

『和光・スポーツ・ジェンダー』を見て

— 学生の感想から

● 私たちが当たり前に着ている服にも長い歴史があるのだと知りました。昔、女性はズボンをはいていなかったのは知っていたけど、男性も騎馬のためにズボンをはくようになったのが驚きでした。オーストラリア女性が初めて水着を着て公然わいせつ罪で逮捕されたのも驚きです。水着はだいぶ変わりました。形や色・素材、機能など思っていた以上です。30年後にはどうなっているでしょう。(K・S)

● 野球は男のスポーツ、このような考えが世の中を駆け巡っています。妹は野球がとても好きで、よく一緒にキャッチボールをします。妹は中学に入った時絶望したのです。「女は野球をすることができない」とがっくり肩を落とした後姿を今でも覚えています。仕方なくソフトボール部に入りましたが形は似ていても違うスポーツで、妹は満足できませんでした。それにソフトボール部にはグラウンドのほんの一角しかあてられません。何回も抗議したのに。男性のスポーツが優先されるのが現実です。妹は今でも野球が大好きです。つい最近女子プロ野球ができました。いつの日にか世界のスポーツとして広がって欲しいものです。(R・N)

● ジェンダーとは一見関係のないように見えるスポーツにも根深い男女差別があることに気付かされた。オリンピック関連資料の「女がスポーツをするのははしたない」とされてきたという一文でスポーツにも男女差別があったのを知った。(Y・S)

● 今ではユニフォームには男女差がないが、昔はスポーツにも女らしくという考えがあったことが分かりました。女性がスポーツの世界に進出したのはごく最近であることに驚きました。マラソンで日本女子は世界的に優れた成績を残しています。近い将来女性が男性を上回るときえいわれているので、早く結果が出て、男女の区切りが少しでもなくなればと思います。もう一つは相撲です。女性の血が汚いという理由で土俵に上げられません。生理のことで知っておかしいと思いました。相撲は日本のスポーツだと外国の友達に誇ることができません。(Y・K)

● スポーツとジェンダーという言葉に繋がりを想像できません

でした。展示を見て二つの概念を繋げることが出来ました。水着はこの3年でも大きく変化して男女の概念が次第に薄れてきたように思います。スポーツ選手の男女比はずっと変化してきました。女性選手の活躍も著しいです。「ジェンダー」は性の区別に限らず生き方に関わる問題だと思っています。(E・S)

● 僕は小学校の時からスポーツが好きで、サッカーをしていました。中学では野球を始め、今はテニスもします。展示で驚いたのは女性のテニス選手がつい最近出現したことや、そのユニフォームでした。女性選手は当たり前だと思っていたからです。女性が参加できていないスポーツにどうすれば参加でき、活躍できるか考えたいですね。(K・M)

● 女性はスポーツの分野から除外されてきた歴史がある。オリンピックの女子参加も意外と最近だ。競技種目も最初は少なく、徐々に増えてきたのだ。「女は無理」という偏見や差別があったからだ。初期のウエアは動きにくそうなもので、女性の着るべきものという概念にとらわれていたのだと思う。(Y・S)

● 女性がスポーツをするのは好ましくないという考えが社会の主流だったのが、ようやく男性と同じようにスポーツをしていけるようになったことがよく分かりました。水着の変化を見ても水遊び・肌を隠すものから機能的なものになった。現代社会では女性のスポーツに対する偏見はかなり少なくなったと私は感じています。(R・Y)

● 水着もテニスウエアもズボンも、女性へのジェンダーバイアスの敗北の歴史を物語っている。男の考えが変わったわけではない。女性が強い立場を獲得してバイアスを打ち破ってきたのだ。ジェンダーに関しては、いつだって事を動かしてきたのは女性だ。過去にジェンダーという視点で女性のために動いた男性がいたのだろうか。(E・A)

● 女性のスポーツが当たり前の時代に生まれた私には想像することしかできませんが、女性が公共の場でスポーツをするには、とても長い時間と労力がかかってきたのだということが分かりました。特に驚いたのは乗馬服の説明です。女性はズボンをはくべきでないという理由からスカートで横乗りをしていたそうです。その安全性を女性＝スカートの習慣のみで無視してきたのです。差別や偏見という言葉すらない時代だったと思います。伝統や格式、習慣と深く結びついているだけに、一つ一つ変えていくのも大変なことなのだと実感しました。(N・W)



▲会場では熱心にメモをとったり映像資料を見る人が多かった。

水着の話

生まれてこのかた、活字を追う目玉の運動と、あれこれの知識を講義する口舌の運動しかしたことのない私に、スポーツについて書け、という無理難題である。鳩山首相の公私にわたる映像を見せられることの多い今日このごろ、かれの操り人形にも似たごちない身体の動きをみていると、この人は天性の運動音痴なのだと思う。私もその種族のひとりなのである。

そんな私も、メタボリック症状が顕著になってきた。もうひとつ、ある朝駅に向かう途中でふと気づくと、同じように通勤途上の人びとに追い抜かれている自分を発見した。これではならぬと、足掻きを速めて、一生懸命歩を進めるのだが、ハイヒールを履いた初老のご婦人にすらたやすく追い抜かれてしまうのだ。大汗をかいたわりには、だれひとり抜きかえせないまま、とうとう駅につくということがあった。

私は決心した。スポーツクラブに通って、身体を鍛え直そうと。しかし、60歳にもなって、いまさら筋トレというわけにも行くまい。ついさっきも言ったばかりだが、運動音痴だから何ができるというわけでもない。ただ瀬戸内に生まれたしあわせには、小さい時分から何時間でも水に浮いていることだけはできる。というわけで、私のプール通いが始まった。そう言っても、抜き手を切って泳いでいるわけではない。溺れたり、沈んだり、藻掻いたり、足掻いたり、連続で、みっともないことこの上なしである。プールサイドに打ち倒れて、颯爽と泳ぐひとに見とれたり、そこらへんを歩き交うひとをぼんやり見ていることの方が多い。

そこで、水着の話である。かく言う私も、最初のころ穿いていたブリーフ型の水着が傷んだので、いまはスパッツに穿きかえた。縞馬柄の女性水着については、さすがの私も石黒コレクションの写真でしか知らない。しかしここ半世紀、女性水着の変貌は著しい。私が知っているだけでも、当初のスカートつきのワンピース水着から、セパレーツ、ビキニ、ハイレグ、トップレスとめまぐるしく変化してきた。そうした変化を裏支えたのは化学繊維の開発だろうが、いまはそのことは問うまい。水着美人を最初

に文学化し、映像化した日本の作家はだれだろう。

すぐに思い浮かぶのは、谷崎潤一郎の『アマチュア倶楽部』（1920）であり、『痴人の愛』（1924～）だろう。『アマチュア倶楽部』は原作谷崎。脚本・監督は栗原トーマス。岡田時彦（岡田茉莉子の父）や上山珊瑚らのキャストのなかでひときわ目立つのが、谷崎の義妹の葉山三千子（本名・せい）である。

「古い伝統を背負う日本の女性を西洋の女性の位置にまで引き上げよう」「女性に精神的優越を得させるためには、肉体から先に用意しなければならない」（『恋愛及び色情』）と考える谷崎の『痴人の愛』には、銀幕のスターたちが目白押しにならんでいる。メリー・ピックフォード、ピナ・メニケルリ、ジェラルディン・ファラー、プリシラ・ディーン、グロリア・スワンソン、ポーラ・ネグリなどなどである。『痴人の愛』にいう。

「ナオミよ、ナオミよ、私のメリー・ピックフォードよ、お前は何という釣合の取れた、いい体つきをしているのだ。お前のそのしなやかな腕はどうだ。その真っ直ぐな、まるで男の子のようにすっきりとした脚はどうだ。」

そして、こうも言うのである。

「その時分私たちは、あの有名な水泳の達人ケラーマン嬢を主役にした、『水神の娘』とかいう人魚の映画を見たことがありましたので、

「ナオミちゃん、ちょっとケラーマンの真似をして御覧」

と、私が云うと、彼女は砂浜に突っ立って、両手を空にかざしながら、「飛び込み」の形をして見せたものです……」

葉山三千子がアンネッテ・ケラーマンと同じポーズをとったスチール写真がいまも残されている。美しい身体のモデルを欧米女性のそれに一元化し、女性の自立を「肉体から用意」しようとした谷崎の壮麗かつ愚かな実験の顛末は作品自体に描き込まれているので、ここではあらためて問題にはすまい。

それにつけても、マスコミの「オグ・シオ」騒ぎをみたりすると、レイモンド・チャンドラーの名科白を皮肉をこめて、ついついもじりたくなるのはどうしてだろう。

「強くなければアスリートにはなれない。美しくなければアスリートになる資格がない」（塩崎文雄・表現学部教授）



「アマチュア倶楽部」の葉山三千子（千葉伸夫著「映画と谷崎」青蛙房・1989年より）

科学技術とジェンダー

1901年に第1回授与が始まって以来2008年までの百余年間に、物理学、化学、生理学医学の自然科学3分野のノーベル賞受賞者の総数は780人となった。そのうち女性の受賞者は何人いるだろうか。女性にして最初の、そして初の2度の受賞者となったマリー・キュリーを2人と数えて13人である^(*)。この数は日本人の受賞者13人と同数である。(アメリカに帰化している2008年物理学賞受賞の南部陽一郎を含む。また女性と日本人とに重複はない。) 受賞者総数780人に対する割合は2.4%。平和賞や文学賞を含めると女性は36人、4.6%に増加するが、それでもそのくらいである。

この数字はなにもノーベル財団が性差別的だというわけではない。科学技術分野の専門職に女性がいかに少ないかを象徴する数字としてあげてみたのである。(ノーベル財団のホームページも、「only 35 women」というページを掲載して女性科学者の少ないことを問題としている。)

「女は理系に向いていない」という言説はいまだに根強いと思われるが、この「向いていない」にはふたつの意味が無自覚に混ぜこまれてるように思う。女性の脳は論理的思考や空間把握に弱い(だから科学技術に向かない)といった、生得能力説とでもいうような言説もあるが(たとえば『地図が読めない女』)、実際のところは、育児・介護・家事などの仕事に女性の労力が期待されていることと、社会が専門職業者として女性に期待するところが少ないこと、したがって女性にとってそういうポストに就ける見込みが薄いこととが、「向いていない」ことの内容として大きいのだろうと思う。生得説はそのような現状を追認する

ための言い訳として機能しているのであろう。カエルが鳴くから雨が降るのか、雨が降るからカエルが鳴くのかを考えてみるべきだ。

DNAの二重らせん構造の解明に貢献したロザリンド・フランクリンが少女時代(1930年代)に理系への進学希望を両親に話した時、父親はそれに難色を示したといわれる。しかしそれは、父親が女は理系に向かないと考えたとか、女は家庭にという考えであったというわけではない。母親は良妻賢母の鑑のような人であったが、同時に精力的な慈善事業家として社会的に活動していた。父親は当時のイギリス社会において、理系の専門職への道が女性にとってはきわめて限られているという現状を慮ったものと考えられる。ちなみにユダヤ教徒のフランクリン家は厳格ながらも開明的な家で、ロザリンドの叔父は強固な婦人参政権論者であった。

科学技術に限らず法曹やビジネスの世界においても、意思決定に関わるポストから女性は排除されている。だから女性が理系に少ないこともそれと同じ要因が働いた結果であるといえよう。とくに理系だからということはない。しかし、学校教育という段階から考えると「理系」を問題としないわけにはいかない。高校のクラス分けが理系文系受験コースに分けられている場合、男女の偏りが大きいことは明らかである。理系文系のコース分けが高校や大学の教育および社会人の科学技術リテラシーの形成に大きな影を落としている問題を指摘するとともに、科学技術という専門職の世界が人口の半分を占める人びとの力を活かすことができるように、社会の意識と制度が変わっていくことを望みたい。

(*)このほど2009年度の受賞者発表があり、自然科学3分野の女性受賞者数はのべ16人となった。

(内田正夫・総合文化研究所)

POSTSCRIPT

ジェンダーフリースペースより

この数年、身のまわりのモノを見直すことからジェンダーについて考えるきっかけをつくりたいと、展示を続けてきましたが、今年も6月に「和光・スポーツ・ジェンダー」を催し、学内外の方がたくさん好評をいただきました。

この展示は2006年9月に島根県立石見美術館が開催した「スポーツウェアの革命—もうひとつの20世紀ファッション展」の図録を手にした時に動き出しました。展示会は未見ですが、スポーツウェアのもつ機能性や快適さが女性のファッションやモードに刺激を与えてきたという視点から近現代のファッション史を展覧したもので、企画時に参考にさせていただきました。

また、学内のスポーツサークルや在学生に呼びかけ、多くのスポーツウェアを提供していただきました。ミズノからは競泳用水着や開発資料などを出品していただき、最新モデルの〈ミズノSST〉はとりわけ注目を集めました。あらためて皆さまのご協力にお礼を申し上げます。

10月下旬には中川素子文教大学教授による講演会「妊娠・出産の美術」、12月上旬にはイベント「やってみよう和光流クッキング」を予定しています。

こうした催しを重ねることからジェンダーへの関心をさらに高めて行きたいと考えています。企画やアイデアをジェンダーフリースペースまで持ち寄っていただくなど、皆さまのご助力、ご協力を願っています。

(柊 光紘・芸術学科)